

韓国への修学旅行

穂岡 謙治*

1. 韓国修学旅行決定まで

国際理解の重要性、国際理解教育、教育の国際化等が叫ばれている昨今、高校の修学旅行で生徒の国際理解を深める意味から海外を旅行先として選ぶケースが増加している。

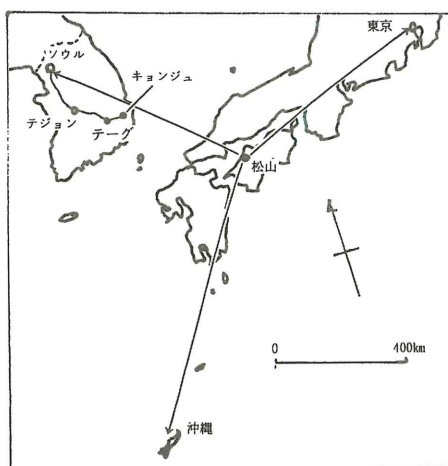
全国の公立高校のうち1995年度の修学旅行で海外へ出かけた学校は、前年度に比べ70校増え、177校に上った。渡航先は、韓国が約60%でトップ、アジア諸国が全体の90%以上を占めている。愛媛県内では松山市の私立高校が1988年から開始し、県立高校も94年から解禁となった。松山-ソウル便が就航した95年度は14校(1094人)が韓国を訪れており、96年度も17校が実施を予定している。

筆者の前任校である松山中央高校(以下、本校とする)でもこうした時代の流れを感じつつ模索をしていたが、開校10周年を記念して、1996年度には、従来の関東方面に加えて韓国・沖縄を旅行先として、生徒にいずれかを選択させる形で修学旅行を企画し、実施した。このうち韓国への修学旅行では、パスポート取得手続き、片言ではあるが英語やハングルによる会話、一流ホテルでの宿泊、韓国の通貨ウォンの使用、外国に我が身を置くことなどの体験を通して、海外旅行でなければ得られない成果を上げることができた。しかし、修学旅行の一大目的である文化や歴史の面からの学習、現地での受け入れ態勢などの点で問題がないわけではなかった。

開校以来8年間の本校の修学旅行は決して画一的なものではなかった。中予の多くの高校が実施してきた往復船中泊と新幹線乗り継ぎの5泊6日又は片道船中泊と新幹線、片道バスと新幹線利用の4泊5日の信州・関東(東京自主研修とディズニーランドが中心)に改良を加え、JR四国を利用して岡山から新幹線往復の3泊4日にしたり、実施時期を一早く夏休みから

1学期の開校時期に変更したりの工夫を凝らしてきた。

こうした流れの中でクラスを解体しての希望によるコース選択性の採用、いずれのコースも航空機利用によりコース間の日程と費用に大差をなくする工夫、愛媛県が推進している松山空港の国際化に便乗した教育の国際化等を取り入れた修学旅行の改善であった。もちろん、実施に当たっては、前年から生徒や保護者への主旨説明、コースや日程・時期等のアンケート調査3度にわたる希望コースの選択、県への書類申請、事前下見調査などをしてきた。結果として、関東コース194名(バス4台:2班に分ける)、沖縄コース94名(バス2台)、韓国155名(バス4台)となり、直前に怪我のため旅行不可能となった2名を除き、2年生445名中443名の参加となった。また、関東コースで1名が最終日に通院した以外は、病人がほとんど出ないというすばらしい修学旅行となった。



第1図 1996年の2年生修学旅行先

海外での修学旅行を実施するにあたっては、①治安・衛生などの安全性、②旅行費用、③旅行期間、④歴史・文化などの教育面での適合性、⑤現地の旅行会社やホテルの高校生に対する受け入れ態勢などの要素が重視される。

韓国の場合、①に関して時として南北関係の緊張が

*愛媛県総合教育センター

高まるが、国際情勢が高校生の修学旅行にも直に関係を及ぼすことがあることを体験させるにはこの上ない貴重な体験と捉えるのは少しオーバーだろうか。②は国内の2コースより約1万円ほど高くついたが、貴重な体験との比較ではその差額を埋めるに足りる差と思える。③に関しては国内コースも往復とも航空機の利用を許可されたことで解決できた。④については、地理はいうに及ばず、日本史や世界史、さらに本校では1年生時に学んでいる国際理解教育の授業において事前学習を十分に行える点で評価できる。⑤についても韓国政府が国営の韓国観光公社を通して青少年の受け入れを積極的に行っており、日本からの修学旅行生に対しては入国の際の査証を免除するなどの優遇措置をとっている。さらに現地の旅行会社やホテルも修学旅行生の受け入れに慣れているため、高校生への対処が適切であった。ただ、同宿した韓国の若者グループの飲酒マナーや部屋利用マナーの悪さに閉口した部分もあり、宿舎に関しては同一階の貸切が望ましかった。

韓国内の行程については、先発の愛媛県の高校が実施しているコースをベースに設定した。即ち、松山ーソウル便の時間帯により自ずと入・出国ともソウルとし、超特急セマウル号を利用して、慶州を往復する3泊4日コースという設定であった。一見変化に乏しいコースのようであるが、列車で韓国縦断往復の旅で車窓に展開する朝鮮半島南部の景観を観察し、新羅時代の古都慶州と、1988年のソウルオリンピック以降急速に近代化を見たソウルを対比することにより、韓国の過去と現在を、大まかではあるが把握できること等を目的とした。

2. 韓国についての事前指導

行程が決定した前年の11月以降、地理を中心に日本史や世界史の授業、ホームルームを利用して事前学習を行った。

地理の授業では、朝鮮半島の気候や地形の自然環境朝鮮戦争以後の南北対立の問題、首都ソウルへの国民の1/4の人口集中に伴う都市の過密問題、アジアNIEsといわれる驚異的な経済成長の背景などを中心に、現在の韓国の状況を講義した。特にこの中で現在もなお準戦時下の緊張が継続している韓国の厳しい実情を理解させると同時に、これと日本を対比することによって、日本がいかにか平和な国家であることを認識させることに留意した。なお、筆者は1973年の夏に経済

成長以前の発展途上の韓国を旅行していたので当時の姿も折り混ぜて講義した。

日本史の授業では日朝(韓)関係について、古代から第二次世界大戦終了までの流れを講義した。その際、いつの時代にあっても日朝(韓)の抗争の歴史については、日本からの一方的な侵略によるもので、そこから派生する韓国(朝鮮)に対する蔑視感情は厳しく批判されなければならないという点に主眼が置かれた。この点に関しては、すでに1年生時の国際理解教育で在日韓国人・朝鮮人に対する差別の不当性を生徒は学習済みなので、深く理解しているようであった。またハングル文字についてもその一端を学習している。

世界史の授業では、おもに朝鮮半島の歴史に重点を置き、朝鮮戦争までの概略を説明した。むしろ、世界史では沖縄の戦後史に重きを置いて講義した。

このほか、ホームルーム活動の時間には3コース別に説明会を2度開いた。特に韓国コースではこれまで4度も韓国を訪れている英語の先生にハングル文字や韓国の生活習慣、韓国の人に接する際のマナー等についてお話をいただいた。沖縄コースについてはこの1年間の沖縄を巡る社会・政治情勢について触れ、関東コースについても松山以上に世界各国からの外国人の多い東京での自主研修のもち方について触れた。

さて、修学旅行の事前指導というと、どうしても旅行先の歴史や文化などの理解という点にばかり目が向きがちである。しかし、海外を旅行先とした場合、出発前に、パスポートの取得と両国の出入国カードの記入という、国内旅行にはない貴重な作業も事前指導に含まれる。

パスポートは155人中8人が既に取得していたが、多くの生徒は旅行業者の3時間に及ぶ申請書類の作成から、パスポート用顔写真の撮影、国際交流センターへの本人による申請等を通して、やっと得た「日本国」と記されたパスポートを手にするにより、これが海外において自分が日本人であることを証明できる唯一の公的証明書となることを強く認識したようであった。出入国カードについては、英語のほかに漢字とハングル文字で表記された韓国のカードが生徒の関心を集めた。そして韓国独自のこの文字を目にした時から、日本海(朝鮮海峡・対馬海峡)を挟んでわずか200kmほどしか離れていないにもかかわらず、日本とは明らかに異なった国家がそこに存在していることを再認識したようであった。国家とは何かということを作業を

通して体験させられるのも、海外を旅行先とした場合の大きな意義の一つであろう。

事前指導の段階でこれまでに得ていた知識から「日本よりも遅れている国」という漠然としたイメージをある程度払拭できたようであった。しかし実際に韓国の姿を見て、生徒たちは韓国の驚異的な発展の現状とそこに潜む問題点や準戦時下の緊張感を正しくとらえることができたのであろうか。以下、行程に従って中央生の見た韓国の実情と彼等の反応を述べてみたい。

3. 旅行中の生徒の反応

(1) 出入国時の緊張に海外旅行を実感する

7月4日午前10時30分松山空港国際線ロビーに集合する。“パスポート確認”の一声に緊張感が走る。隣では同じ飛行機に乗る今治西高校の修学旅行団80余人が今治からバスで到着するや直ちに荷物の搬入を始める。今秋に修学旅行を計画中の三島高校の視察の先生も2名みられる。パスポート入れの小荷物バッグを手に、搬入荷物をカウンターに預け、出国手続きを開始する。何人かの生徒は係官のボディチェックに反応が見られ緊張感が倍加する。出国手続きカウンター通過はもはや中央高校生旅行団から一日本人として念入りにチェックされていることが係官の目つきで感じられる。緊張の一瞬である。この緊張感をこの後韓国入国、韓国出国、日本入国の3度も経験することとなる。このカウンター通過後はそこがもはや日本でないことを事前に強調しすぎたためか、生徒はしばらく緊張の面持ちであったが、乗客の殆どが同じ高校生のせいかすぐに和んできた。

12時35分に松山空港を離陸したアジアナ航空(OZ)175便は、約1時間30分でソウルの金浦国際空港に到着。生徒たちは日韓両国の近さに驚くとともに、愛媛から一気に外国に行ける時代の変化も体験したようだ。途中、韓国上空にさしかかる付近で雲が厚くなり、下界は殆ど見えなくなる。簡単な機内食を食べ終わると、もう着陸体制に入るサインが放送される。窓からはぼんやりと高速道路や林立するビニールハウス・中高層のアパート群が見え隠れする。ほんの1時間余りのフライトをお世話して下さったステイワーズの明るい応対に気持ち良く韓国への第一歩を記した。空港内のバスに乗ってから下車するまでが長く、金浦空港の広さが実感できた。途中、先月に福岡空港でオーバーラン事故を起こした白いジャンボ機と同型のガルーダ・

インドネシア航空機に出会い、思わずカメラのシャッターを押した。韓国の入国審査は厳しいと聞かされていたが、乗客の殆どが団体の高校生のせい、意外にスムーズに通過できた。順次出される荷物を受け取り4日間お世話になる漢南旅行社の金社長や4人のガイドさんらとの対面式に臨む。各号車毎に代表者から松山の名菓とハングル文字で書かれた愛媛県の観光ガイドブックと日本茶をお土産としてお渡しし、お互いの自己紹介を行う。外はあいにくどしゃぶりの雨であった。

(2) ソウルの近代化に驚く

雨の中、最初の見学地のソウルの中心にある景福宮に向かう。ソウルの市街の南部をS字状に東から西に川幅一杯に水をたたえてゆっくり流れる漢江を渡り、交通渋滞のソウル市内へと進む。初めて見る韓国の風景もハングル文字以外には殆ど違和感を感じない様子である。建物、車、信号、人、商品、どれをとっても日本の街となんら変わらない。そういえば車が右側通行であるのと、そのスピードの速さとクラクションの騒音が日本よりはかなりひどいと感じた。



写真1 ソウル中心街のビル群

現存する朝鮮王朝最古の建物で今も昔もソウルのシンボルである国宝第1号の南大門を取り囲むダウンタウンのビル群

事前学習で韓国の急速な発展について十分に説明したが、その時点では、日本にはおよばないであろうというタカをくくった様子が見受けられた。しかし、林立する高層ビルや、日本の自動車一台も見られず韓国車が走り回っている様子を目の当りにして、彼等も認識を改めざるをえないようであった。このような韓国の近代化を流暢な日本語で説明するガイドさんの表情が自信に満ちていたのが印象的であった。ただ、こ

の1～2年の間に続いた漢江に架かる橋の落下やデパートの崩壊事故はあまりの急速な近代化のひずみの表れであることは素直に認めておられた。

(3) 壮麗で広大な殿閣が栄華を物語る景福宮

景福宮は朝鮮王朝を建国した李成桂によって1394年



写真2 ソウルで最も高い63ビルと漢江に架かる橋

に建てられた最初の王宮で、41.6万㎡の広大な敷地に200棟を超える殿閣があり栄華を極めていたが、1592年の文禄の役により焼失させられた。このうち王の即位式や文武百官の朝礼などが行われた伝統的な美しさと雄大が見事な勤政殿と迎賓館の役割をした2階建の壮麗な慶会楼などを見る。最初の見学地のせいか、熱心に説明に聞き入っており、これからの旅行に期待が持てた。残念だったのは降りしきる雨であった。勤政殿の前（南側）には日本が侵略時に朝鮮総督府を置いていた国立中央博物館をながめることができた。日本の統治時代のシンボリックな尖塔部分はこの時既に解体され、この建物自体の存続についても議論がかわされているとのことであった。しかし、11月に訪れた人



写真3 解体が進む旧朝鮮総督府 前には光化門が建つ

の報告では建物全体の解体が進められていた。

(4) 濃霧でソウルタワーからの展望をあきらめる

ソウル駅東方約1kmの海拔265mの山頂の南山公園に高さ240mのソウルタワーがそびえている。ここからの夜景の美しさは格別でソウルの全体像を知る上で絶好の地と思いコースに入れていたが、あいにくの豪雨と深い霧で視界は殆どない状態となり、頂上でバスを引き返さざるを得なくて残念であった。

(5) 旅行の楽しみ グルメ を堪能

修学旅行とは言え海外での旅の楽しさの一つとしてグルメを堪能することは大きな要素となっている。ソウル最初の夕食は韓国式焼肉のプルコギ専門店「ゴインドル」でとる。牛肉の薄切りを甘いタレに漬けて鉄板で焼き、サンチュ（サニーレタス）に巻いて食べる。お代わり無制限のキムチを御飯に混ぜて食べると食欲は普段の2～3倍はすすんだ生徒もいたようだ。

2日目の慶州往きのセマウル号での車内弁当もそのボリュームの多さに閉口する者もいたが、辛さにつられて結構いただけた。慶州での夕食は海鮮鍋を皆でつつきながら、民俗舞踊を觀賞する。朝食はバイキング形式の洋食と韓国食で時間が短くて残念だった。3日目の昼食は韓国民俗村の「韓国館」で韓国式混ぜ御飯の石焼きビビンバを食べる。御飯の上に大豆モヤシなどの野菜や牛肉、卵、薬味をのせたアツアツの石の器が出てくる。トウガラシみそを混ぜ込むため凄い辛さで大汗をかきながら食べた。

(6) ソウルから慶州（キョンジュ）へ列車の旅

韓国での2日目は昨夜の豪雨から一転して日本の初秋の晴れ間を思わせる好天に恵まれる。ソウル市内の近年の物凄い朝の交通ラッシュを避けるため、7時40分に宿舎のオリンピックパークテルを出発する。漢江南岸のソウルオリンピックの会場となった総合運動場を左にながめながらソウル駅へ走る。9時30分発の特急セマウル号乗車前の時間を利用して、1925年に東京駅をモデルに造られたソウル駅舎を背景に号車毎に集合写真の1枚目を撮る。駅構内は首都の名の付く駅の朝にしては人通りはそんなに多いとは思えなかった。朝鮮半島のほぼ真ん中に位置してはいるが、韓国の国土で見れば殆ど北の端に位置する為、ここから北の方に行く人は皆無の為か。南北統一時には今日の何倍も

の交通量と予想される。一部の地方線の発着をヨンサン（竜山）駅やチョンリャンリ（清涼里）駅に分散させていること、高速バス網に乘客を奪われてきたこと等も利用者が意外に少なく見えた要因と思えた。

韓国第2の大都市釜山（プサン）とソウルを結ぶ京釜線セマウル号は30分毎に相互に出、この間を4時間20分余で結んでいる。列車はソウル駅を出てすぐに漢江鉄橋を渡ると右手にソウルで最も高い建物の大韓生命63ビルが見えてくる。その後住宅地域を南下し、水原（スウォン）に向かう。1時間30分程で大田（テジョ



写真4 東京駅をモデルにしたソウル駅

ン）市に着くが、この間は低平な平野の間に丘陵地が見え隠れし、田植え後1カ月半を経た稲がすくすくと育っていた。丘陵には野菜畑が目立ち、ソウル近郊では促成栽培のビニールハウスが異常に目についた。

93' EXPOの開催地大田は豊かな平野の中心にある交通の要衝で、光州（クワンジュ）と大邱（テグ）方面への高速道路や鉄道の分岐点に当たる。ここからはやや山がちとなり、カーブも多く、沿線にはブドウ・スイカ・高麗人参・野菜などの畑が目立ち始める。高麗（朝鮮）人参は強壮剤、万病の薬として知られ韓国土産の代表とされるが、非常に手間のかかる作物で、播種して5年後にやっと収穫できる。直射日光を嫌うため日除けをかけて栽培する。

さらにここから1時間30分余後に大邱市に着く。この付近では梨やリンゴが加わって、内陸高地の雰囲気を感じる。こうした風景の変化に興味を示す生徒もいて、海外旅行を企画した側としては大変嬉しく思った。反面、昨夜は初めての外国の夜ということで興奮して眠れなかったのか、睡魔に襲われる者やゲームに興じるグループもあり、がっかりさせられた。大邱から京釜線の幹線は南下して釜山に向かうが、我々の乗った

列車は蔚山（ウルサン）行きで、ここからは支線となりスピードも半減したようだ。乗客の殆どは観光地慶州で降りてしまった。なお、大邱から分かれる蔚山と浦項（ポハン）行きセマウル号は一日2本ずつ運行されている。13時41分に列車は慶州駅に到着した。

(7) 多くの古墳と仏教文化が新羅千年の古都慶州を彩る

慶州到着後は天馬塚古墳、国立慶州博物館、仏国寺などを見学した。新羅王朝（前57～後935）の古都とはいうものの、現在の人口はわずか14万人余の一地方都市であるため、京都や奈良のような観光都市を想像していた生徒達は少々拍子抜けしたようであった。

新羅の首都であった慶州の市街地には、味鄒王陵地区古墳公園のほかにも、5～6世紀の大型古墳が少なからず民家群と同居している。慶州は統一新羅時代（676～935）の後、高麗時代（918～1392）には東京と呼ばれたが13世紀の蒙古侵入によって兵火を被った。その後住民は古墳の裾に寄り添うようにして住み着いていた。朝鮮時代（1392～1910）には慶州府となり、慶州邑城が造られた。



写真5 慶州（キョンジュ）の町並み

1.2万点もの副葬品が発見された天馬塚（チョンマチョン）をはじめ、7基の巨大な新羅王陵を中心に23基の古墳群を整備した古墳公園を見学する。ここでは大分県からの観光団と出会い、韓国と九州の距離の近さを実感した。彼等は福岡からジェットフォイルで約3時間で釜山に着き、2泊3日で釜山と慶州を観光中であった。

古墳公園からは慶州のシンボルで東洋最古の天文台と言われている瞻星台（チョムソンデ）をバスの中から眺め、国立慶州博物館へ向かう。ここには小学生一

行が多数訪れており、生徒達はお互いに手と目で会話をしたり写真を撮って交流していた。博物館には先史時代から統一新羅に至る文化遺産が展示され、今も遺跡発掘のたびに所蔵品が増えているという。特に天馬塚から出土した黄金の冠や宝剣が有名。庭には有名な東洋最大の釣鐘、聖徳大王神鐘（エミーレの鐘）が下げられ、鑄造の際、いけにえにされたという少女の悲しい伝説を今に伝えている。また、展示されている石仏の多くは鼻が欠けていたが、これは韓国では石仏の鼻を削って煎じて飲むと男の子が生まれるという信心からとの説明であった。

博物館からは南東へ約20分ほど走り、仏国寺に向かう。仏国寺は慶州を代表する観光地で多くの観光客で賑わう。5月の下見の時には韓国の修学旅行シーズンで中・高校生でごった返していたが、今回は夕方のせいもあってか静かであった。新羅法興王22（535）年に創建され、200年後の最盛期には現在の10倍のスケールで拡大されたが、文禄の役（1592～96）で焼かれ、今の建物はその後修復されたものである。石造部分だけは当時のままで、新羅文化の完成度の高さを伝えている。

ガイトさんはその石組の一部の焼け焦げた跡を示し、秀吉の悪行を語ってくれた。回廊に囲まれた大雄殿は丹精で細密に鮮やかに彩色され、釈迦牟尼仏を安置した内部の装飾も見事である。木造のように優美な多宝塔と男性的な釈迦塔、極楽殿の阿弥陀仏など、数多くの宝物を持つ寺である。近くの石窟庵とともに、世界遺産に登録されたことを知らせるハングル文字の看板



写真6 世界遺産に指定された仏国寺

石造の多宝塔は創建当初のもので、その壮麗さは美術的には世界的逸品と称せられている。

の真新しさが不釣り合いであった。

宿舎の「慶州コーロンホテル」は松林に囲まれた静か

な所にある特1級ホテルで、改修直後で快適であった。部屋や館内設備は素晴らしかったが、同宿していた韓の若者は夜中まで酒を飲み、廊下に出て騒ぐモラルには腹だたしさを覚えた。

7月6日（土）ホテルでのバイキング朝食を摂り、慶州駅に向かう。駅前では多くの市民が露天の野菜市場に群がっていた。また、チマ（パジ）・チョゴリの民俗衣装をまとった老人達が韓式将棋に興じていた。



写真7 慶州駅前の活気あふれる市場

8時35分発ソウル行きセマウル特急に乗り、昨日来たレールを天安に向け出発。駅に停車中の鈍行列車には遠足途中の高校生の一団がおり、窓越しに手振りや筆談で交換し合った。

(8) 京釜高速道路で見たもの・聞いたこと

11時53分にソウルの南約90kmの天安（チョナン）駅に着く。駅前の露店で果物を売るおばさんの姿をバスの中から写しているのにつきり答えてくれた。バナナ・オレンジ・モモ・スイカ・ウリなど季節の果物を山盛りにして売っていた。高速道路に向かう途中、土曜日の昼過ぎに下校中の高校の正門前を通る。バスを止めて彼等と話し合いを持てたらと思ったが、155人の大勢では急には予定を変えられず、眺めるだけで通り過ぎる。

天安市の東方、バスで約20分の所に独立記念館がある。400万㎡の広大な敷地に7つの展示館や27の附属施設を持ち、韓国民族の国難克服史と国家発展史に関する各種資料が展示されている。日韓併合時の日本軍の行動が厳しい視点で展示されており、5月の下見の時には韓国の多くの中・高校生が見学に訪れていた。今回はこの見学は時間的に無理であったが、将来的にはコースに組み入れるとよいと思う。

高速道路に上がると、バスはあっという間に100km以上のスピードとなる。しかし、他のレーンの車はのろのろ運転である。最近の韓国は車の数が急増し、高速道路の渋滞は日常茶飯事と聞いていたがひどいものと実感した。そんな中、我々を乗せたバスはすいすいと走れるのは、土・日曜日の特例で6人以上乗っている車の優先レーン設定のお陰であった。誰ひとり優先レーンに割り込んで来ないマナーの良さに感心しているとガイドさんが苦笑しながら、凄い額の反則金が待ち受けているからですと説明してくれた。ここ以外では僅かでもすきがあればすぐに割り込んでくる韓国の運転マナーの悪さに驚いていたので奇妙に思えたことが納得できた。天安から20km程北上すると太田・公州(コンジュ)・扶余(プヨ)等で知られる忠清南道からソウル・仁川(インチョン)・水原等で知られる京畿道(キョンギド)に入るが水原に近づくとゴルフ場が多く見られ、近郊農業の施設園芸のハウスや野菜畑も目立ってきた。また、高速道路の混雑は上下線ともさらに加わってくる。沿線には工場も目立ち、郊外型の住宅団地も多くなり、大都市ソウルの都市圏を想像させる。今年6月初めに日韓共同開催が決定した2002年のサッカーのワールドカップ誘致の大きな看板も目をひいた。



写真8 渋滞する高速道路の空いたレーン

バスの中でガイドさんが話してくれた韓国の受験競争を紹介すると、韓国では毎年11月、日本のセンター試験に相当する全国規模の大学考査が実施される。この考査の点数と内申点によって合格する大学が決定される。この考査で高得点を得るため、日本を凌ぐ激しい受験競争が展開されるという。大学の数が100余と少ない上に韓国でも進学率の高まりで競争の激化は凄しいという。朝7時に登校し、夜10時頃まで学校で勉強し

その後塾へ通い、深夜まで勉強する生徒もいるとのことにはいささか驚いたが、進学が念頭にある本校生の中にはこの話に圧倒され、日本はいずれ韓国に抜かれるのではないかと考えた者も多数いたようだ。この話に刺激を受けて学習への自覚が出てくればこの旅行の効果は大なのだが果たしてどうだろう。もちろん、日本と同じく受験に係わるいろいろな問題点は後を絶たないとのこと。男尊女卑のひどい韓国では男の子への期待の大きさから親の熱の入れようは想像を絶するものがあり、特にソウル大学への志望熱の高さは日本の東京大学の比ではなさそうである。そういえば私が1973年の夏に訪韓した時にも既に受験競争の厳しさは感じていた。夏休み中なのに多くの高校生が、制服のまま公園で脇目もふらず暗記に熱中する光景を見かけた。当時は冷房もなく、涼しい公園の木陰で勉強していたのである。

(9) 水原の韓国民俗村で古き良き韓国を知る

朝鮮王朝(1392~1910)500年の生活の歴史と伝統文化を再現した民俗村では、各地方の農家とその生活様式、当時の両班(ヤンパン)の邸宅、鍛冶屋、官庁、餅屋など王朝時代の生活がしのばれた。鍛冶屋では、昔の生活用品を作って販売したり、農楽、祭礼行事などの民俗公演もみられ、韓国の昔の姿を想像できる所である。稲藁(わら)葺きの屋根は今ではここでしか見ることができないが、セマウル運動が展開されるまでは全国至る所で見かけた光景であった。ここでは女性は短い上衣のチョゴリと優雅なスカートのチマ、男性は上衣のチョゴリにズボンのパジの民族衣装をまとい、ゆったりとした生活風景を演出している。芋飴の朝鮮飴を買ったり、おしおき道具に友達を繋ぎ、罰の



写真9 韓国民俗村の稲わら屋根の民家

鞭を打って遊んだり、民族音楽を聞いたりした。時間が足りなくて十分に見たり体験したりできなかったのは心残りであった。昼食時間を含めて4時間位はゆとりが欲しかった。

15万㎡の広大な敷地に各道の農家や民家、寺や市場、屋敷など大小200余りの古い建物が並び、竹細工・木工などの工房での実演や伝統的な結婚式の公演が見れる。また、韓国ならではの作物や家禽（かきん）、キムチを漬け込む甕（かめ）を実際に見ることができ、大陸性の厳しい冷え込みに備えた朝鮮半島独特の床暖房のオンドルの構造もよく理解できた。

(10) ロッテワールドでのショッピング

韓国コースを選んだ理由の一つに外国でショッピングができることをあげた生徒がいた。これまでの行程中でもそこそこのみやげ物は買い込んでいたが、さすがにロッテワールド内の免税店を前に生徒達の目の色が違っていた。室内型の遊園地でパレードや乗り物を楽しむ者はわずかで生徒たちの多くは免税店に集中したようだ。約4時間の自由時間も時間不足気味で満足に夕食も摂らずに買物に走ったようであった。翌日免税店で買った品物が大量に航空機内に持ち込まれたのには引率者全員があっけにとられたほどであった。それでも誰一人として買物でトラブルがなく、韓国への信頼感が高まった。買物の中味は靴・衣類・化粧品・革製品・文具等かなり名の通った品物のような感じ。もちろん、チョコレートやキムチや小物類を買い込んだ者も多くいた。東京ディズニーランドや日本各地のテーマパークに慣れた今日の日本の高校生は、ソウルのロッテワールドでは物足らなかったようだ。

(11) 膨らんだ韓国の思い出を胸に帰国までの一日

再び夜景の美しいソウルの漢江沿いにバスを走らせオリンピックパークテルにたどり着いた。買い込んだみやげ物の荷造りにいそしむ者、家族や友人への国際電話に列をなす者、食べ損ねた夕食にレストランに降りて来る者等いろいろな形で最後のソウルの夜を過ごしていた。翌朝エレベーターで降りる際の混雑は膨れ

上がった荷物で想像を超える凄さであった。

空港への途中、韓国みやげの代表とされるキムチの土産品店に寄り、予定通り7時50分頃に金浦空港に到着した。4日前には雨の降りしき中、不安と期待の気持ちで入国手続きに並んだが、今朝は好天の空のようなさわやかな気持ちでみんな興奮気味に出国手続きの列に並んだ。日曜日の朝便で世界各地に飛ぶ乗客でごったがえす空港では思い通りに手続きが進まず、か



写真10 宿舎のオリンピックパークテル

なりの生徒が予定時間までに通過できず少々気をもんだが、20分ほど遅れて離陸した。早くから乗り込み、機内で待たされた今治西高校の皆にはご迷惑をかけたしまったが、松山着は5分遅れ位でほっとした。

両手に一杯の荷物を掲げて、今度は入国手続きである。松山からバスで今治まで帰る今西生に先を譲り、手荷物検査に臨んだが、誰一人とがめられる者もなく全員無事帰国となった。ロビーで団長の近藤校長のお話の後、お世話下さった名鉄観光の神野（こうの）さんのご挨拶を受けて解団式を終え、松山空港で12時前に解散する。ほとんどの生徒の保護者が出迎えに来ており、たった3泊4日の海外旅行とはいえ、初めての海外旅行の者が多く、心配だったろうと思えた。家路までの車中や今夜の親子の会話に期待をしつつ、1年余の準備の苦労も忘れて我々引率団も解散した。

[付記] 本稿は、筆者が前任校松山中央高校に在職中の1996年11月に記したものである。